



日本現代文學全集・講談社版 58

廣 津 和 郎 集
宇 野 浩 二

編 集
伊 藤
龜 井 勝
中 村 野
山 本

日本現代文學全集

58

廣津和郎・宇野浩二集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和39年4月10日 印刷
昭和39年4月19日 發行

定 價 500圓

© KODANSHA 1964

著 者 廣 津 和 郎
 ひろ づ かず お
 う の こう じ
 宇 野 浩 二

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 綾 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東 京 都 文 京 區 音 羽 町 3 ~ 19
電 話 東 京 (942) 1111 (大 代 表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 大 日 本 印 刷 株 式 會 社
寫 真 株 式 會 社 興 陽 社
版 印 株 式 會 社 岡 山 紙 器 所
製 本 株 式 會 社 第 一 紙 藝 社
製 函 株 式 會 社 小 林 榮 商 事 株 式 會 社
背 革 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社
表 紙 ク ロ ス 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社
口 繪 用 紙 本 州 製 紙 株 式 會 社
本 文 用 紙 安 倍 川 工 業 株 式 會 社
函 貼 用 紙 三 菱 製 紙 株 式 會 社
見 返 し 用 紙 神 崎 製 紙 株 式 會 社
扉 用 紙

廣津和郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

崖	七
神經病時代	一〇
師崎行	四
線 路	四
やもり	五
波の上	三
隠れ家	五
勝者敗者	三
訓練されたる人情	一〇

あの時代	二三
------	----

散文藝術の位置	一四
再び散文藝術の位置について	一七
散文精神について	一五
散文藝術諸問題	一五
再び散文精神について	一六
正宗白鳥小論	一六
怒れるトルストイ	一六
二葉亭のリアリズム	一七
志賀直哉論	一八
「うつりかはり」と「思ひ川」	一八
わが心を語る	一九

一本の絲	100
作品解説	中村光夫 四八
廣津和郎入門	瀬沼茂樹 四三
年譜	四六
参考文献	四五

宇野浩二集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

藏の中……………二〇九

苦の世界……………二二〇

子を貸し屋……………二九五

枯木のある風景……………二九七

子の來歴……………三〇〇

うつりかはり……………三五八

近松秋江論……………三九三

芥川龍之介——追悼……………四〇四

武者小路實篤……………四〇六

作品解説……………中村光夫 四一六

宇野浩二入門……………瀬沼茂樹 四二四

年 譜……………四三七

参考文献……………四四六

廣
津
和
郎
集

去年は思つたほど暗い

山の草木がいけんど

唯次々と変化する

散るゆくのかけ

廣津和弘

昨年のものであつた。父が知多半島の師崎ししきの病院に入つてゐたので、私は九月の初めから一ヶ月ばかり、或翻譯の仕事を持つて同地に出かけて行つた。その病院といふのは二三ヶ月ばかり前に開いたばかりで、まだ設備など整つてはゐなかつたが、併し如何にも自由で暢氣なのが好かつた。病氣の恢復したものは間代だけ拂つて薬など飲まないでも、氣兼ねなしにそこにあることが出来た。私の父はもう殆んど全快してゐた。醫者も薬を飲む必要はないと云つてゐた。それだから、父は入院してゐるといふよりも、母と一緒にその一室を借りて、自炊してゐるといふに過ぎなかつた。

私はその病院から三町ばかり隔つたところに静かな部屋を借りて、食事だけ父母のところに食べに行つた。

この町は名古屋附近の人々の避暑避寒の保養地となつてはゐたが、それでも東京附近の海岸のやうに惡ずれたところがなく、質朴で平和なのが私の氣に入つた。

私はその頃かなり健康を害してゐた。何處と云つて特に悪いところがあるわけではなかつたが、身體が甚だ衰弱して、物事に倦み疲れ易かつた。病院の患者達は汐風に吹かれて色が黒いものだから、私の顔色の蒼白さが却つて目立つて、彼等よりは寧ろ私の方が病人らしく見えたさうである。

私は仕事の根氣が續かないので、よく一人で海岸を歩きまはつた。この町は知多半島の一帯突つ鼻にあつて、前面は渥美灣に向つ

てゐた。蜿蜒えんえんとして長く延びてゐる渥美半島によつて外洋から護られてゐるこの内海は、小さな島嶼が多く、潮水のやうに靜かで美しかつた。この町の海岸線だけを見ても、その屈曲の様がなかなか複雑な趣きを持つてゐて、私の眼をたのしませて呉れた。私はステッキを持つて、四邊の景色に眼を配りながら散歩してゐると、かなり靜かな幸福な心持になつた。

もう父の病氣も全快した。昨年の父の容態から見ると、父の恢復は思ひがけない程早かつた。それが私には限りなく喜ばしかつた。今はその外には別段心にかかる雲もない。私は久しぶりで自然の景色に向つて、少しも蟬せみのいない、晴れ晴れした氣持で對する事が出来た。

海岸の右端には小さな丘陵が小さな岬みさきを作りながら海中に突き出てゐて、その丘陵の上に何とかいふ神社があつた。土地の者達はこの神社の附近——つまりその丘陵全體を神聖なものと見做してゐて、そこに生える草や木の花は、何人と雖もこれを摘まなかつた。私は始終その丘陵に登つて行き、そこから海の景色を眺めた。

その小さな岬は師崎の港を形造る牆壁となつてゐるばかりでなく、また渥美灣と伊勢灣との丁度中間に位してゐた。左を向けば渥美灣に沿うた低い山々がかすかに見え、右を向けば又伊勢灣の彼方に高い山々が重なり合つて聳えてゐるのが見えた。私は丘陵の一番末端に立ち、よくこの海と山との廣々とした大きな風光を眺めた。私は胸がからつと開けて來るのを感じた。私は腹の底から力いっぱい大きな聲を出して、「おうッ」と長く引つぱつた叫びを揚げたりした。私は歡喜に似た感情を経験した。と同時に、自分の聲の響きの中に、長い間いろいろな事のために胸の中になんかの間に積み重なつてゐた憂鬱が、一時に勃發したとでも云ふやうな、或重苦しさの爆裂を聞いた。

或午後、私はその岬の上から長い間師崎の町を見下ろしてゐた。小さな港の中には漁船が群がつてゐた。空はすっかり霽れ切つて明

るい碧色に光り、初秋の太陽を照り返してゐた。私は汀線の屈曲と海の色と、それから汀線に沿うた小さな家々とその家々の背後に迫つてゐる緑色の丘陵と、それ等總ての上に降りそいでゐる日光と、さうしたものの間に、何とも云はれない或調和を認めた。私は長い間描いたことのない繪を描いて見たいやうな氣持になつて、心の中に圖取りを考へてゐた。

五六町隔つた病院の縁側から、一人の人が海岸の砂の上に下りたのを私は見た。それが私の父である事が直ぐ私に解つた。父は岸に立つて、手を額にかざして、眩しい日光の眼に當るのを避けながら、此方を眺めてゐた。私は子供らしい喜びを感じて父の行動を見成つてゐた。父は暫く立つてゐたが、手を振つた。それが何の合圖か私には解らなかつた。けれども私は父に應へるために自分も手を振つた。

父が再び病院の中に姿を隠してしまふと、私はその丘陵を下り、岸に沿うて歸りかけた。

私はふと崖崩れのために落ちたかなり大きな石の塊が、道端にころがつてゐるのを認めて、足を停めた。それは見たところ淡青色で、表面がすべすべしてゐて固さうであつた。私はステッキでその石を叩いて見た。すると固さうに見えた石は、そのステッキの一撃によつて、潭山の龜裂を生じた。私は興味を起して、そこに蹲んでその石を尙もステッキの先で叩いた。石はボロリボロリと、丁度方解石が缺けるやうな工合に氣持よく缺けた。私は一種の愉快を感じた。そしてよく調べて見るとその缺けた面は赤い錆色を呈してゐた。私はそれが何といふ石かは知らないが、その錆色を見た時、その部分は乾度雨の水がにじんで、自然にそこに眼に見えない龜裂を生じてゐたに違ひないなどと、そんな想像をめぐらしてゐた。

そこに、突然私の背後から父が聲をかけた。私は立上つて手の砂を拂ひながら振向くと、父が急ぎ足に私の側に近づいてゐた。

「おい、どうかしたんぢやないか？」と父は急いで歩いたために息

を切らしながら心配さうに云つた。

「いいえ」

私は父の間に吃驚して眼を隠つた。

「それならよかつた……私はさつきから心配してゐたんだよ。お前があの岬の崖の上に立つてゐた時、もし眩暈でもしてよろけたら大變だと思つて……お前はよく眩暈のする人だから……」

「おお、それでは最前父が病院の前の岸から私に手を振つたのはそのためだつたのか。……私は笑ひながら云つた。

「大丈夫です。僕は崖から一間ぐらゐ離れたところに立つてゐたんですから」

「さうか、病院から見ると、お前が崖の直ぐ縁に立つてゐるやうに見えたもんだからな。……その中お前がすすり下りて來たと思ふと、直ぐここに蹲んでしまつたらう。私はお前がてつきり眩暈を起したんだらうと思つたのだ……」

父と私は互に笑つて、そして一緒に病院の方へ歸つて行つた。

その翌々日の朝、私が朝飯を食べに病院に行くと、その頃にはいつも起きてゐる父がまだ寝てゐた。私は意外だつたので不安を感じながら訊いた。

「どうかなさつたんですか？」

「ああ、今朝から血が出るんだ」と父が低い聲で云つた。「どういふわけか私には少しも解らないんだがね。もうこんな事のある筈はないと思つてゐたんだが……」

私は非常に驚いた。私は父の枕許の瀬戸物の痰壺の蓋を取つて見ると、黒ずんだ血がかなり多量に出てゐた。

父は時々咳をした。その都度尙も少量の血が痰にまじつて出て來た。

やがて院長が診察に來た。私は父の病氣がまたすつかり元に戻つてしまつたのではないかと、院長の顔から眼を放さなかつた。それは大學を出たての若い醫學士でおちついた感じの好人であつた。

「胸部には何の異状もありません。ラッセルなども少しも聞えませんが、多少呼吸の延長は聞かれるが、併しこの位の延長は普通の人にもあります」

さう云ひながら、院長は痰壺の中を調べ始めた。

「ははあ」と彼は云つてうなづいた。「色の黒いところを見ると、この血は古いですな。今出血したのではなく、前に出血したのが何處かに溜つてゐて、それが出て來たものと思はれます」

「さうですか」

父は見當のつかない顔をしてゐた。私もどういふ事かよく解らなかつた。

「近頃何かひどい運動でもなさつた事はありませんか」

「さあ」と父は考へて、「別段ありませんが。二週間ほど前にMさん（病院附の醫師の名）と一緒に山に登つた事がありました：「」

「いや、そんな前の事ではありません。……併し、兎に角、そんなに御心配になる事はありません。今日と明日と、靜かに安臥していらつしやれば、直き恢くなりませう」

そして院長は歸つて行つた。

父も母も私もやや安心した。父は院長の云ひつけを守つて、二日間しづかに安臥してゐた。そして三日目にはすつかり元氣を恢復して、元通りに起上り、再び外を散歩するやうになつた。やがてその時の咯血はそのまま原因が解らない中に、いつか忘れられてしまつた。

父は今鎌倉に私達と一緒に住んでゐる。父の健康はもうすつかり恢復して、病氣前よりも肥えて、體重なども若い時にさへなかつた程の重さに達してゐる。

私は一年程経つたこの頃になつて、ふとその時の父の咯血が、私があつた岬の上に立つてゐたのを見て、父が餘り心配して胸を痛めたためではなかつたかといふ事を考へ出した。院長は何か過激の

運動のためだと云つたが、併し過激の運動でなくとも、餘りに烈しい心配などから、同じ結果を惹起することは確かにあり得るに違ひない。殊に私の父のやうな極度に鋭い神經を持つた人には、さういふ事が一層ありさうに思はれる。

けれども、そんな事を考へ出すと、今更ながら或胸苦しさを覺えて、「あッ、あぶない」と云つたやうな不安を感じて來る。私はそれを始めて考へついた時、自分の身のまはりが、今更ながら急に顧みられるやうな氣がした。

（大正六年九月「新潮」）

神經病時代

一

若い新聞記者の鈴木定吉は近頃憂鬱に苦しめられ始めた。その憂鬱が彼にはいろいろの方面から一時に押し寄せて来るやうに思はれた。彼には周囲の何も彼もがつまらなくて、淋しくて、味氣なくて、苦しかった。第一には彼の家庭である。彼は今から半年ほど前に一人の若い女と同棲した。同棲前に彼と彼女との間には既に一人の男の子が生れてゐた。二人の生活はうまく行かなかつた。……けれども、これはもつと後で説く事にしよう。

今は何よりも先に彼が新聞社でしてゐる仕事を例に取つて見よう。彼はS——新聞社の社會部の編輯見習で、月給三十圓を貰つてゐる。彼は朝九時に出社しなければならぬ。S——新聞は東京中の新聞といふ新聞の中で、最も忙がしい新聞だと云はれてゐる。一體は夕刊新聞なのであるが、近頃は正午版までも出し始めた。だから九時に出社して、十時半にはもう直ぐ正午版の締切と云ふ事になる。いろいろの通信が電話で来る。外交記者や通信社が原稿を書いて寄越してゐては、時間が間に合はなくなるからである。

定吉はこの電話を聞かなければならないのが、第一に厭であつた。大概の人間は一ヶ月も経つと直ぐに耳が馴れるさうだけれども、定吉はもう入社してから三ヶ月にもなるのに、未だにそれに馴れなかつた。締切時間の間際になつて、氣が急きながら卓上の受話器に

耳を當てると、彼の聽神經は妙に興奮して、耳の中がガアンと鳴つてゐる。

「淺草區——町二番地△吉長男□吉（六つ）は本日午前七時三十分頃同家前の往來にて遊戲中通りかかりたる同區××町四番地〇〇商會の自動車に轢殺さる、運轉手夏野三造を象潟署に拘引目下取調中」「麻布區廣尾町△△番地○職……」

電線を傳はつて来るか細い聲が、定吉の耳の中のガアンといふ響きと入れ雜つて、驚職と云ふ音が、どうしてもはつきりは聞き取れなかつた。

「何ですつて……モシモシ、廣尾町△△番地……それから何職ですつて？」

「トビ職ですよ」

「タビ職？……ああ、モシモシ、電話が大變遠いやうです」定吉は自分の張り上げた聲が、何だか泣聲のやうに甲高く調子が外れて來るのを感じた。

「これでも解らないかな……驚職ですと云ふのに……鳥や鳶のあのトビですよ」

「鈴木君、その電話の事件は何だね？ 何か大事件ですか？」と社會部長の齋藤が彼に聲をかけた。

「子供が自動車に轢かれたのが一つと、それから今一つあるのです」「……定吉は齋藤の方へかう答へて置いて、再び受話器に向つた。「モシモシ、解りました、その驚職が……なるほど、驚職内山市スケ……スケは介ですか助ですか……な、なるほど……その母のりつ……なるほど年齢六十八歳……なるほど……」そして彼の右の手に握られた鉛筆は、机の上の原稿用紙の上をやけくそに早く走つた。

その通信はその内山市介なる驚職の母親の六十八歳になる老婆が、浮世を悲觀して、半月ほど前から二度縊死を企てたが、その都度家人に發見されて成功しなかつたのを、本日午前四時頃家人の寢

すましたる隙を窺ひ、同家臺所の梁に細引を吊して三度目の縊死を企て、終に自殺を遂げたといふのであつた。原因は不明だが、同家は別段貧困と云ふ程ではないから、恐らく生活難のためではあるまいといふことであつた。

定吉はその通信を別の原稿用紙に清書してゐるうちに、その老婆のみじめな死様が眼の前に浮ぶやうな心持がして來た。彼は子供の時分に近所の老婆が縊死したのを、女中の背中におぶはれながら見に行つた事があつた。その時の光景をそつくりそのまま思ひ出したのである。白髪をふり亂して、からだ全體がだらりと力なく梁からぶら下つて、そして鼻からは氣味の悪い黒い汁を二すぢ垂らして

「生活難でない」とすれば、如何なる原因だらう？」と定吉は筆を動かしながら考へた。よくある奴だが、市介の女房が腹黒い女でもあつて、老婆を虐待したのだらうか？ 彼はふとメチエニコフの「人生論」の中に、生に對する本能は老年になつて肉體が衰弱するに従ひ、却つて益々察つて來る。だから若い青年は血氣にはやつて厭世や悲觀の爲に自殺するが、老人にはさういふ事は殆んどない、若し老人が自殺する事があれば、其場合は殆んど其全部が生活難の爲である、其他の原因では極めて稀であると云つても差支へない、と云ふ意味の事が書いてあつたのを記憶に思ひ浮べた。「して見ると、若しこの老婆が生活難で自殺したのではないとすれば、これには何か非常に悲惨な原因がその底に横たはつてゐるに違ひない」

さう思ふと、定吉は胸を締めつけられるやうな苦しさを感じて來た。彼にはこれがこの上ない大事件のやうに思はれて來た。議會の論戰の報告よりも、U——首相が議會でとつちめられて、顔を眞赤にしなから返答が出来なかつたといふ報告よりも。そこで彼は清書した原稿を社會部長の机の上にさし出した。

「何か大事件ですか？」社會部長の齋藤は一わたりざつとその原稿に眼を通しながら、「自動車の轢死と老婆の縊死か」と退屈さうに

云つた。

「老婆の縊死の原因は生活難ではないさうです」と定吉は「生活難ではない」に特別な意味と力を籠めて云つた。それが社會部長の心に或感動を與へるに違ひないと確信してゐるもののやうに。

ところが、社會部長の顔色は少しも動かなかつた。彼は、「牛島君」と彼の次席に坐つてゐる金縁眼鏡をかけた色の生白い男の方に向いて、「君の書き取つた通信の中にも、自動車の事故があつたやうでしたな。あれとこれを一纏めにして、『人殺車の横暴』と云ふみだしを二號で附けといへ呉れ給へ。全部で十二三行ぐらゐに。——かう自動車の事故が毎日々々出來しては、實際一個の立派な社會問題となるからね」さう云つて今度は定吉に向ひ、「この老婆の縊死は二行にして呉れ給へ。『市井の塵』の中に入れるから」

定吉は呆氣に取られて、ぼんやりしたやうな、悲しいやうな氣がした。彼は八行ばかりに書いた老婆の記事を二行に縮めようと苦心したが、なかなか出來なかつた。何處も彼處も必要のやうな氣がした。そして死人を棺につめる時、棺の外にはみ出る手足を掻きばき折つてしまふあの葬儀屋の男と同じやうな殘虐を、自分が働いてゐるやうな氣がした。

「どうしても五行より縮まりませんが」

「どれどれ、貸して見給へ」社會部長は半分笑ひながら、半分たしなめるやうな顔をしながら、定吉の原稿の文字をまるで器械仕掛のやうに素早く赤インキで消して行つた。「それ見給へ。こんなに縮まるぢやないか」

定吉は自分の前に投げ返された原稿を、一所懸命眼に力を入れて熟視した。その記事は次のやうになつてゐた——

「麻布廣尾町内山りつ（六八）は今朝四時自宅臺所にて縊死す」

時計が十時半を報つ。「締切！」と社會部長が叫ぶと、給仕がそれを鸚鵡返しに「締切」と叫びながら、柱のベルのボタンを押す。

それが階上の植字工場の方へ行つて、チリンチリンとけたたましく鳴つてゐるのが、定吉の耳にも傳はつて来る。

「ああ、半日済んだ！」と定吉は腹の中で溜息した。

牛島が大組をやり、階上の工場に上つて行く。定吉はそれを見習ふために後から蹤いて行かなければならない。それが済んだ。そして十一時三十分には最下層の印刷工場から輪轉機がグワラグワラと大きな聲で唸り始める。給仕が刷り立ての新聞紙を持つてとんとんと梯子を駆け上つて来て、編輯局の片隅からそれを配つて歩く。定吉は自動車の記事が三面の中段に二號活字で麗々しく出てゐるのを見た。そして隅つこの方の「市井の塵」の中に、老婆の縊死が萬引と詐欺との間に挟まつて小さく出てゐるのを悲しさうな顔をして見た。

正午頃の編輯局は雜聞の頂上に在つた。外交記者達がぞろぞろ歸つて来る。煙草の煙がもやもやと天井に棚引く。埃が舞ひ上る。その中でみんなが辨當を食べながらガヤガヤ雑談する。その雑談は先づ食物から始まつて、次に女の話に移り、それから金や貧乏の事になつて行くのであつた。この順序には毎日々々少しの變化もなかつた。女の話は金縁眼鏡をかけた牛島の獨占であつた。

「さうですよ、女と云ふ奴は物にするのはわけはないが、六ヶ敷いのはその別れ際ですよ。上手に別れるやうになれば、もう一人前ですからな」

貧乏の話はまた主として外交部長の吉田の口から語られた。彼は某私立大學の政治科を十年も前に出たのに、未だに新聞記者としての好い位置を贏ち得られない自分の不遇や、子供の五人ある事や、もう長男はやがて中學にやらなければならなくなるだらうと云ふやうな事を、くよくよ語つては、自分より五つも年の若い社會部長の齋藤に向つて、「あなたは實際派しい」と云ふのが常であつた。(外交部長は社會部長の部下なのであつた。)

そして吉田はまた始終この正午の短い休みの間を利用しては、外

交記者達に叱言を云ふのであつた。定吉はこの社の總ての事がみんな自分には適さない、憂鬱を誘ふ種でないものはないと感じてゐたが、中でも一番吉田の外交記者達に叱言を云ふ時の聲を聞くのが厭であつた。——吉田は色の黒い、鼻の下に髭のチヨボチヨボと生えた、出つ齒の、額の狭い、下等な顔をした男であつた。

「幾ら云つても君には解らないのか。君は文章さへも碌すつぽ書けないぢやないか」かう若い外交記者に向つて、編輯局中に聞えるやうな大聲で怒鳴つてゐる吉田の様子を見ると、定吉はいつても心の畏縮するのを覺えた。

食後は夕刊の原稿が来る。外交記者が出て行く。定吉は電話を聞く。それは又午前と同じ繰返しなのである。二時になると「締切！」と齋藤が叫ぶ。けたたましく植字工場の方でベルが鳴る。太組に行く牛島の後から定吉は見習ひについて行く。

時計が三時を報つ。すると、もうみんなが退社する時間なのである。けれども定吉にはまだ仕事があつた。それは社會部長が白つばい鼠色のサンマアコートを引つかけながら、かう命令して行くからである。

「鈴木君、甚だお氣の毒だが、明日のおひこみを三段ばかり工場に廻しといつて呉れ給へ」

そこで定吉はひとり後に残つて、豫備の原稿を抽斗から出して、片つ端から讀み始める。

時計が四時を報つ。すると、それは給仕達が退社する時間なのである。彼等は急いで机や椅子を片付け始める。亂暴に床を掃くものだから、埃が天井までも舞ひ上る。定吉は眉をひそめながら、袂からハンケチを出して口と鼻とに當てる。彼は自分の母が肺結核で死んだのを思ひ出して、出来るだけ埃を吸ふまいとするのである。けれども彼は「もう一寸靜かに掃除」とか、「そんなにガタガタ騒がしい音を立てるな」とか、給仕に命令する事は出来ない。物を命令すると云ふやうな力は、生來彼に缺けてゐるものの如く見える。

……
かうして定吉がおひこみを工場にまはして社を出て行く時は、いつも四時半を過ぎてゐた。

二

秋の初めの或夜であつた。定吉は右の手にステッキを持ち、左の手はふところに入れながら、銀座通を歩いてゐた。彼は子供の時分に始終女中の背中におぶはれたつたので、それがためかなり足が内側に彎曲してゐた。それがセルの袴と羽織との上からさへも少し注意して見ると、直き眼についた。若しそれさへなければ、彼は日本人としては随分身長が高い方なので、スラリとして立派なのであつた。彼は眼鼻立もよく整つてゐた。眼には優しさと愛嬌とがあつた。けれども眉と眉との間が少し距離があり過ぎたり、口が小さくて唇が薄かつたりする邊りに、何處か或力の——意思の力の缺けてゐる事を表はしてゐるやうな處があつた。

尾張町の停留場に來て彼は佇んだ。そのまま電車に乗つて家に歸る氣にはなれなかつた。と云つて彼は別段何處にも行くめあてはなかつた。彼はカッフェ・ライオンの壁に凭れながら、幾臺も幾臺もの電車をやり過した。彼の眼は前方を見つめてゐた。が、別段何をも見てゐるのではなかつた。ただ都會のいろいろの灯が混り合つて、ぼうつと一つの塊になりながら、彼の眼に映つてゐるに過ぎなかつた。——彼はぼんやり社の事だの家庭の事だのを考へてゐた。が、さういふものがみんな自分には親しみのない、適さないもののやうに思はれて來た。

「さうだ、俺見たやうな人間はこんな風な生活をしてゐる事は間違つてゐるんだ」と彼はいつもよく考へる事を考へ始めた。が、彼はその考が彼の心の深いものに觸れる事は避けてゐた。で、途中からその方向を轉じさせて、かう腹の中で呟いた。「ああ、田舎に行きたいな、何處か靜かな田舎に。そして本を讀まう。トルストイを讀

まう。自分はやつぱり一番トルストイから教へられる……」そして彼はトルストイの「主人と下男」のニキタの美しい心などを思ひ出した。彼は都會のこの刺戟の多い煩雜な生活が、堪らなく厭になつて來た。

彼は東京で生れて東京で育つた。實際のところ、彼は田舎には三日か四日しか行つた事はなかつた。だから、彼の云ふ田舎がどこに行つたらあるのか見當はつかなかつた。けれども、彼の想像した田舎は美しかつた。……そこには小川が流れてゐた。彼はそこで釣糸を垂れる事が出來た。そこには森があつた。彼はそこで小鳥を撃つ事が出來た。そこには廣い畑があつた。彼はそこを散歩することが出來た。そして人情が醇朴で、みんなが彼を尊敬した。さうだ、彼はいつの間にかそこで小學校の教師になつてゐるのであつた。彼は子供たちにトルストイのお伽話をはなしに聞かせるのである。すると子供たちは、みんな嬉々として彼になづく。子供達の祖父や祖母である爺さん婆さんが、大根だの胡瓜だのを、彼の家の縁側に持つて來ては置いて行つて呉れる。……定吉は夢のやうな氣持になつて來た……が、彼は急にそんな事を話したら、妻がどんなに怒るだらう、と云ふ事を思つた。

「あんな女とは別れてしまふのだ。……が、どうして別れる、子供をどうする？」

彼はもう考へるのが厭になつて來たので、さういふ思想を打拂ふために、頭を左右に振つた。

「おい」といきなり定吉の肩を叩いたものがあつた。「ぼんやりしてゐるぢやないか」

見るに相川が立つてゐた。定吉はここで友達に會つたのが嬉しかつた。

「やあ」と彼も云つた。
「社の歸りか？ それにしては随分遅いね」と相川は云つて、「どうだい、その邊を少し散歩しないか？」

「ああ、してもいい」

そこで二人は歩き出した。

「珈琲でも飲みに行かないか？」と相川が云つた。「僕は今小説を書き出したんだがね。どうしてもうまく行かなくて困つてしまつたんだ。もう一昨日から一つの峠にかかつて、筆が少しも進まないんだよ。——その峠さへ越してしまへば、もう後はわけはないんだが」

「長いものか？」と定吉は訊いた。

「いや、短篇なんだ」と相川が云つた時、二人はとある横町のカツフェの前に来てゐた。二人はそこに入つて行つた。

「うまく行くか行かないか解らないが、一つの新しい試みをやらうと思つて書き始めたんだがね……」と相川が言葉を續けようとした時、左手の隅の方から、突然「よう！」と云ふ聲が聞えた。そこには一つの卓子に向つて二人の青年が腰をかけてゐた。遠山と河野とであつた。

「やあ、此處に來い！」と云つた遠山の聲はもう酔つ拂つてゐた。

「いい處で連中が集まつたものだね。俺は今日は非常に愉快で堪らないんだ。まあ、聞けよ。俺も今日から愈々社會人になつたんだよ。おい、社會人に。君たちは俺が社會などに出ると、一たまりもなくつぶれてしまふと豫期してゐたらう。ところが、それは大違ひ、働かうと思へば俺は何でも出来る男なんだ。俺が今まで働かなかつたのは、俺のたましひが大切だつたからだ。だが、俺は今働くだぞ。俺は一人の女房と二人の子供のために今日からうんと働くぞ。そして彼等に安心させてやるぞ。さうだ、うんと働く」遠山はかう叫びながら、「さあ一杯」と定吉に盃をさした。

「僕は飲めないよ」と定吉は云つた。彼は酒が少しも飲めなかつた。けれどもかう云ふ場合でも彼は盃を押し返す事は出来なかつた。彼はそれを受けた。そしてそつと唇に當てたが、酒の香にむかむかとした。

「そして何處に出て働くことになつたんだ？」と相川が靜かに訊いた。

「××雜誌の訪問記者になつたんだ。月給十九圓、十九圓とは變挺な勘定ぢやないか。一體なら二十圓さし上げるべきところ、目下社が不振だからと云ふので、一圓けづるんだつてさ。一圓、たつた一圓……」遠山はおどけた手附をして叫んだ。彼の指は兩手の十本ともその尖端に行つて妙に丸くぶくりと彫れてゐた。彼に云はせるとそれは子供の時分畑に出て働いた勞働の印だと云ふことであつたが、彼が酔つ拂つてその指をうんと擴げながら、おどけた調子で手を振る時には、何だかそれ等の指先のふくらみが、兩蛙の吸盤を思はせた。

「ポオイ君、僕にウキスキイを一杯」相川はさう注文した。「君は何にする？」と定吉の方を向いて、「珈琲か？ よし……ポオイ君、それから珈琲を一杯」そして遠山の方へ云ひかけた。「だが、十九圓ぢや食へなからう」

「併し、今までの一文なしよりは食へるさ」と遠山は答へた。「俺の故郷の家もたうとう破産してしまつたさうだ。何しろ三年つづいて林檎に蟲がついた上に、今年も亦あの邊は大嵐があつて、とても望みがないんださうだからな。併し總てが仕方がないんだ。かう云ふやうになるやうに出来てゐたんだ。先日親父から來た手紙に、もう愈々これから無心を云つて來ても一文も送る事が出来な手紙に、そのつもりでゐて呉れと書いてあつた。親父は山の中に小さな二室か三室の家を建ててその方に移つて、今までの屋敷も地面もみんな人手に渡してしまつたんださうだ。俺はそれを讀んだ時涙がこぼれたよ。ほんとに俺の親父はいい親父なんだぜ。親父は俺の十九の時から去年まで丁度十一年間毎月々俺に金を送つて呉れてゐたのだ。俺がいつか出世するだらうとそれ wait してゐるのだ。ところが、俺は酒ばかり飲んでゐた。俺は學校さへも卒業しなかつた。俺はなまけ者だつた。そして俺はもう女房に二人も子供を生ませてし